

写真で見る
ひらかた
今昔

枚方市市制施行65周年記念冊子

懐かしいまち並みや風景、人々の暮らし…。 枚方の貴重な変遷の記録を一冊に

広報ひらかたで平成22年8月号から連載中の「写真で見るひらかた今昔」では、枚方市内で撮影された昔の写真を現在の姿と比較しながら、当時の様子やまちの風景を市民の思い出とともに紹介しています。懐かしいまち並みをはじめ、稲作や祭りといった風俗など、人々の暮らしぶりやうかがい知ることが出来る貴重な記録ばかりです。

枚方市は、平成24年に市制施行65周年を迎えたことを記念し、これまでに掲載した記事を一冊にまとめました。冊子を通して市がたどってきた歴史や変遷に思いをはせ、故郷への愛着を深めていただくとともにこれからも市民の皆さんと力を合わせ、枚方の未来を築いていきたいと考えています。

平成24年11月

枚方市

大 京 大
津 都 阪

目次

- 4 枚方大橋 (昭和5年)
- 5 津田駅 (昭和33年)
- 6 楠葉 (昭和27年)
- 7 枚方市民病院 (昭和27年頃)
- 8 ひらかた温泉 (昭和10年代後半～20年代前半)
- 9 長尾大池 (昭和45年)
- 10 香里団地 (昭和33年)
- 11 枚方市駅 (昭和30年前後)
- 12 中宮保育所 (昭和27年)
- 13 ごみ収集 (昭和27年)
- 14 天野川 (昭和27年)
- 15 枚方まつり (昭和51年)
- 16 津田支所 (昭和44年)
- 17 樟葉駅 (昭和40年代前半)
- 18 枚方バイパス (国道1号) (昭和37年)
- 19 枚方警察署 (昭和32年)
- 20 御殿山 (明治30年代末～40年代初頭)
- 21 伊加賀 (明治時代)
- 22 中宮映画劇場 (昭和18年頃)
- 23 宮之阪 (昭和29年)
- 24 おおがいと大垣内の稲作 (昭和29年)
- 25 長尾駅 (昭和40年頃)
- 26 くずはモール (昭和47年)
- 27 淀川 (昭和34年)
- 28 年表



▲古鉄橋を譲り受けて作られました（昭和5年）。



▲国道170号の一部で、大阪の「外環状線」にもあたる現在の枚方大橋。



▲開通の日には、小学生による渡り初めなど盛大な祝賀行事が開かれました。

枚方の発展を支え、架橋80年を迎える

枚方大橋

今から80年前の昭和5年10月10日、枚方と摂津三島方面を結ぶ枚方大橋が開通しました。当時は、大阪・長柄橋から京都・御幸橋間の淀川流域に架かる唯一の橋で、長年の要望が実った地元の歓迎ぶりは相当なものでした。開通当日は、提灯行列やおどんの炊き出しなどまちを挙げてのお祭り騒ぎだったそうです。「記念式典には芸子さんも来て、華やかでしたよ」。地元の幼稚園に通っていた早川久春さん（三矢町・86歳）は、その日のにぎわいを今でも覚えているそうです。「それまでは高槻への渡し船しかなかったから、立派な橋ができたのが嬉しゅうてね。開通してからは、よく兄と橋を渡っては高槻の川岸へシジミ採りに行ったものです」と懐かしく思い出を語ります。

初代の枚方大橋は、京阪電鉄の宇治川・木津川の鉄橋架け替えの際に、府が古鉄橋を譲り受けて造られたものでした。長さが694メートル、幅6.64メートルで、淀川兩岸を結ぶ大動脈の役割を果たし、枚方の発展を支えてきました。現在の2代目は、旧橋の老朽化と交通量の増加のため昭和43年に架け替えられたもので、平成14年度から18年度にかけて耐震補強が施され、災害時の緊急輸送路に位置付けられています。12時間当たり約3万4500台（平成22年度調査）が通る交通の要所で、今も市民生活に欠かせない橋として活躍しています。

（平成22年8月号）



▲昭和33年当時の2代目駅舎。春にはホーム上の桜並木がきれいな花を咲かせていました。



▲現在の駅舎は3代目。1日に上下約160本の列車が行きかいます。



▲まだ田園が広がる津田-長尾間で貨物列車を引く蒸気機関車(昭和33年)。

河内そうめんも弾薬も運んだ、東部市民の足

津田駅

明治31年4月12日、津田駅は四条畷-長尾間を結ぶ新しい鉄道の駅として誕生しました。明治時代、枚方から大阪へ向かう交通手段といえば淀川を行きかう船でしたが、津田や長尾の人にとって淀川は遠く不便で、大阪へ行くのに半日以上もかかっていました。大阪と奈良を結ぶ鉄道の計画が持ち上がったのを機に津田・菅原の両村で鉄道の誘致運動が起こり、駅の用地を鉄道会社に寄付するなど住民の熱い思いもあって、現在のJ-R片町線(学研都市線)のルートが決まりました。大阪市内への通勤に津田駅を利用していた春日元町の奥田一雄さん(85歳)は、「貨物の引き込み線に河内そうめんの木箱が積まれていてね。駅前の運送会社が忙しそうに荷物を運んでいましたよ」と貨物輸送で賑わっていた頃を振り返ります。戦時中は禁野火薬庫から津田駅まで軍用鉄道が敷かれ、大量の弾薬が戦地に向けて運ばれたこともありました。

片町線には、昭和25年の電化後もしばらく蒸気機関車が走っていました。「窓を開けたら煙がどんどん入ってきて服はすぐ真っ黒。でも大阪から枚方に入ると空気が涼しく感じられてね。家に帰ってきたなんて嬉しくなったものですよ」と奥田さんは懐かしそうに話します。片町線は昭和54年に四条畷-長尾間が複線化され、平成9年には東西線の開通により神戸や宝塚へのアクセスも便利に。津田駅の利用者は一日平均約1万2000人(平成21年度)を数え、開業から112年を迎えた現在も東部市民の重要な足として欠かせない存在です。

(平成22年9月号)



▲一面に広がる田んぼの中で遊ぶ楠葉託児所の子どもたち（昭和27年）。
右上の木立ちは鏡伝池付近、奥の山並みは男山丘陵と考えられます。



▲樟葉小学校の屋上から東側を撮影。中央の木々は鏡伝池がある市民の森。男山丘陵は男山団地に姿を変えています。



▲当時の楠葉託児所の建物を今も利用する楠葉保育園。園内には昔と変わらず子どもたちの元気な声が響きます。

田園地帯から活気ある住宅都市へと変貌した

楠葉

のどかな田園地帯で輪になって遊ぶ子どもたち。今から58年前、南楠葉2丁目の楠葉託児所に通う子どもたちが、樟葉小学校付近の田んぼでお遊戯をする様子を撮影したものです。当時、田植えて忙しい農家を助けるため、お寺や地域の人たちによって「農繁期託児所」が市内各所に設置されていました。「お遊戯のほかにも花摘みや虫捕りをしたものです」と、託児所に通っていた楠葉野田3丁目の樋口和代さん(63歳)は懐かしそうに話します。樋口さんは今、楠葉託児所を受け継ぐ「楠葉保育園」(写真右下)の園長として、子どもたちの成長を見守っています。

写真が撮影された昭和27年、現在の樟葉駅前には葦原の湿地が広がっていました。当時から楠葉に住む80代の男性は「晴れた日にはエビやドジョウを捕る人が訪れましたが、いったん雨が降ると一面は広大な池のようになりました」と言います。水はけの悪さから宅地化は進まず、今よりやや北側にあつた樟葉駅は乗降客の少ない閑散とした駅だったそうです。しかし、高度経済成長により住宅地需要が増えつつあつた昭和42年、京阪電鉄が「くずはローズタウン」の造成をスタート。京阪電鉄で初めて自動改札機を設えた新しい樟葉駅や、広域型ショッピングセンター「くずはモール街」をはじめ、公園、学校、病院などが計画的に整備され、急速に都市化していきました。5年前の再開発を経た楠葉は今、活気ある住宅都市としてにぎわいを見せています。

(平成22年10月号)



▲昭和27年ごろの市民病院（正面）。病棟の一部は旧陸軍禁野火薬庫の建物を利用していました。



◀現在の市民病院（正面玄関）。



◀新病院のイメージ。平成26年度の完成を目指します。

開院から60年、市民の健康を守り続ける

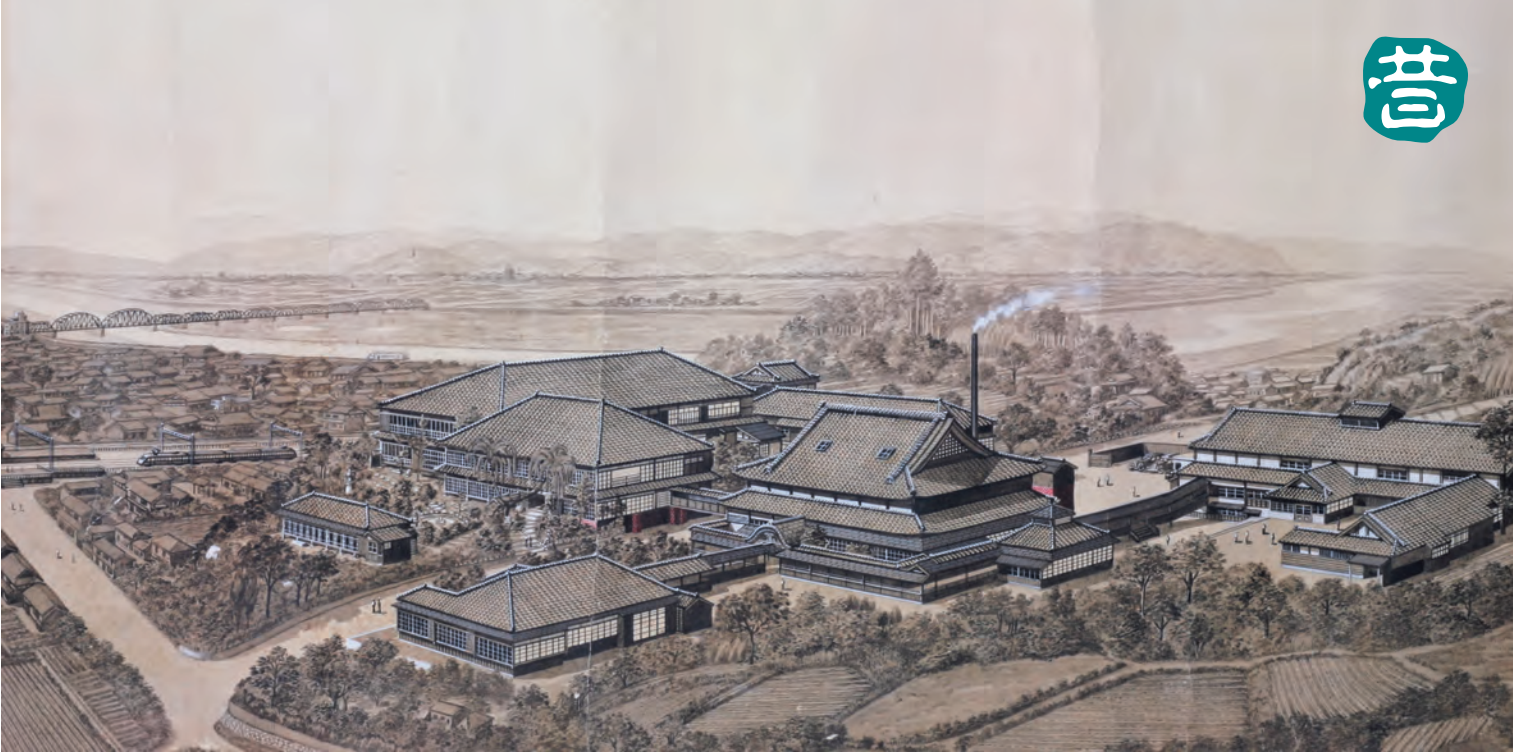
枚方市民病院

枚方市民病院は、今からちょうど60年前の昭和25年4月15日、陸軍禁野火薬庫の跡地に誕生しました。内科・外科のみで病床数26、医師と職員合わせてわずか21人のスタートでしたが、つらい戦争を体験した市民にとって、爆弾を作っていた場所から人の生命を守る場所に生まれ変わった市民病院の存在は、大きな安心感を与えるものでした。

開院当初、病棟の一部は旧陸軍の建物を改装して使用していました。冬は木造の病室を冷たいすき間風が吹き抜け、大雨のときは雨漏りも。昭和31年から看護師として勤務し、最後は総看護師長を務めた亀井愛子さん（76歳）は、「泊まり込みでバケツを持って走り回りました」と当時を振り返ります。まだ医療や設備が大きく進歩する以前のことです。看護は二交代制。夜勤は一人で担当したため、夜中の検査ともなると休憩もとれない忙しさだったといいます。「人の命を預かっているという思いで夢中でした」。

市民病院は昭和34年に総合病院の指定を受け、地域の基幹病院として市民に幅広く医療を提供してきましたが、昭和37年に建て替えられた現在の建物も老朽化が目立ってきました。現在、平成26年度の完成を目指し、7階建て・病床数335の新病院の整備を進めています。多様な診療に対応できる地域の中核病院として、これからも市民の健康を守り続けていきます。

（平成22年11月号）



▲昭和10年代後半から20年代前半ごろのひらかた温泉の全景を描いた絵。
左後方には枚方大橋と淀川が望めます（意賀美神社蔵）。



▲正面のマンションの辺りにひらかた温泉がありました。



▲ひらかた温泉玄関先の田中絹代と三船敏郎（昭和27年）。

銀幕スターも訪れた一大レジャー施設

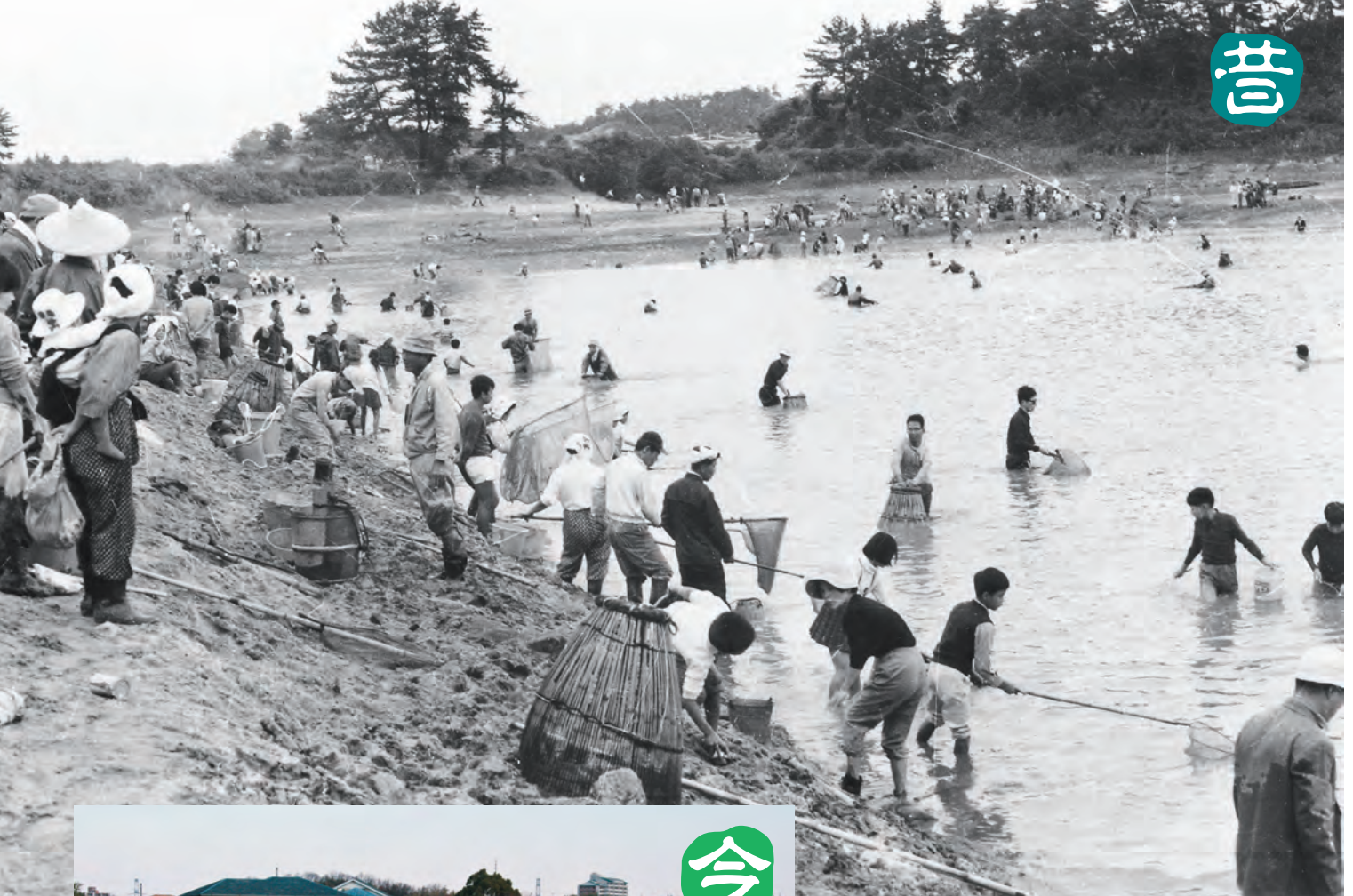
ひらかた温泉

枚方公園駅東側の坂を登ってすぐの丘にあった「ひらかた温泉」は、旅館や浴場、料亭、カフェ、遊戯場、芝居小屋まで備えた一大レジャー施設でした。周辺の企業や市民が宴会などで利用したほか、枚方パークの大菊人形展が開かれる秋には、各地から多くの観光客が訪れました。「バスでやってきたお客さんが菊人形を見た後、うちで食事をして風呂に入るのが定番でしたね」。経営者だった井上久一さん（81歳）は語ります。ひらかた温泉は、大正時代に設けられた療養所の土地2000坪を井上さんの祖父が購入し、昭和の初めごろにオープンしました。写真を元に描かれた全景図（上図）には、中央に煙突の見える浴場、その左に旅館、右手に芝居小屋を経て映画館となった建物などが描かれ、規模の大きさがよく分かります。

昭和27年、「昭和の大女優」田中絹代と、「世界のミフネ」こと三船敏郎がここを訪れました。枚方パークで溝口健二監督の映画「西鶴一代女」の撮影が行われていたときのことです。シャッターを押したのは、当時まだ学生だった井上さん。「三船さんは『一緒に飲みましょう』と誘ってくれる気さくな人柄。田中さんは背筋をスッと伸ばし、いかにも大女優という風格でした」と懐かしそうに話します。

平成3年、ひらかた温泉は約70年の歴史に幕を閉じ、跡地はマンションや駐車場となりました。

（平成23年1月号）



▲長尾大池で雑魚捕りを楽しむ住民たち（昭和45年）。



▲池の周辺には住宅が立ち並びます。

地域こそって「雑魚捕り」を楽しんだ

長尾大池

江戸時代から北河内では、農業用のため池にコイやフナ、ウナギなどを放流して養殖し、水を抜いて池をさらった時に捕まえる「雑魚捕り」という行事が盛んでした。捕れた魚は、洗いや甘露煮にして食べたり、売って村の収入にしたりしていました。

江戸時代前期に築造された長尾大池でも古くより雑魚捕りが行われていたと考えられます。昭和に入ってから干ばつなどで水位が下がった年にだけ行われたため、10年、15年に1度の一大行事となりましたが、大人から子どもまで大勢の人たちでにぎわいました。写真は今から約40年前の雑魚捕りの様子を撮影したものです。長尾で農業を営む分林正明さん（77歳）も中学生の頃に参加したことがあります。「大池の雑魚捕りは地元の人にとってお祭りのようなものでした。みんなが何カ月も前から道具を作って準備し、心待ちにしていたものです。5kgを超えるコイも捕まえたことがありますよ」と懐かしく語ります。また、農業用水が不足した時は雑魚捕りが終わった後の残り水を「銭水」として売っていたそうです。

今も地域の水田に水を供給し続ける長尾大池ですが、現在では当時のような雑魚捕りは行われなくなり、水鳥が羽を休める場所となっています。護岸はコンクリートで整備され、池のほとりの木々だけが、昔と変わらず水面を吹く風に揺れています。

（平成23年2月号）



▲入居が始まった香里団地（昭和33年）。



▶建て替えられ高層化した団地。

今

▶米国司法長官ロバート・ケネディ夫妻も訪れました（昭和37年）。



「東洋一」と言われ、ケネディの弟も訪れた

香里団地

台所と言えば土間が主流であった昭和30年代、ステンレスの流し台や水洗トイレ・ガス風呂といった最新設備を備えた団地は庶民の憧れで、「団地族」という流行語も生まれました。

旧陸軍の火薬製造所があった場所に日本住宅公団が昭和31年から開発を始めた香里団地は、総面積139万平方メートル、5214戸の規模を誇り、団地内に、市役所の支所、郵便局、診療所、市場など生活に密着した施設や広い緑地がある郊外型団地のモデルとなりました。

「東洋一のマンモス団地」として注目され、昭和37年には、ケネディ大統領の弟で当時の司法長官ロバート・ケネディ夫妻も視察に訪れました。夫妻は開成小学校を訪問し、にこやかに子どもたちの握手に応じました。当時同校で教師をしていた三好園子さん（80歳・茄子作在住）は、「報道陣がたくさん来て大騒ぎでした。子どもたちの米国歌の演奏に直立不動で胸に手を当てている姿を見て、真摯な姿勢を感じました」と印象を語ります。

かつて火薬工場があった香里の地に団地が誕生したのは、平和を願う市民の運動が実ったからです。完成から約半世紀が経ち、一部建物が建て替えられるなど少しずつ変わってきた香里団地ですが、今もここでは、子どもからお年寄りまでが広々とした公園に楽しそうに集い、平和な生活を営んでいます。

（平成23年3月号）



▲枚方市駅南口（昭和30年前後）。一日の乗降客は約2万人。手前の車は客待ちのタクシーです。



◀一日利用者9万人を超え、京阪線では京橋・淀屋橋に次ぐ乗降客を誇ります。



▲混雑するホーム（昭和44年）。

まちとともに発展した市の玄関口

枚方市駅

都会的で開放的な駅舎と広い駅前広場を持つ京阪・枚方市駅は、今から101年前の明治43年、京阪電車の開通とともに「枚方東口駅」として開設され、昭和24年に現在の駅名となりました。

枚方市駅は昔から京阪線有数の乗降客の多い駅で、「乗り降りに時間がかかり、満員の電車はブレーキも効きにくくなるので、枚方市駅にさしかかるときには一層気を引き締めていました」と、昭和34年に京阪電鉄に入社し、運転士も務めた松島志朗さん（74歳）は話します。市駅近くで生まれ育った松島さんは「駅の南側は低い木造家屋が建ち並んで雑然としていました。北側には岡本町商店街があって、親に連れられてよく買い物に行ったものです」と振り返ります。まだ駅は高架化されておらず、西側には『開かずの踏切』で有名な踏切がありました。「私が子どものころは手で、電車が近付くと踏切番の人が笛を吹きながら手で降ろしていたのを覚えています」と話します。

市の人口が増えて市駅の乗降客も急増してきた昭和40年代、ラッシュ時のホームは人で溢れ返り、駅の拡大や駅前整備が急務となりました。そこで、昭和47年に駅前広場の再開発が、昭和53年には高架化工事がスタート。長い年月を経て、平成5年に市の玄関口としてふさわしい駅が完成しました。高架下や駅中でグルメやショッピングが楽しめるようになり、多くの人でにぎわっています。

（平成23年4月号）



▲懐かしい木製遊具で遊ぶ子どもたち（昭和27年）。右手前の建物が当時の中宮保育所。



▲3代目となる現在のの中宮保育所。ジャンクルジムは子どもたちに人気の遊具です。



▲昭和24年の開設当時に建っていた場所。現在はマンションに姿を変えています。右側のマンション（北端部分）が中宮保育所でした。

戦後復興のなか地域とともに子どもを育んだ

中宮保育所

中宮保育所は昭和24年5月、枚方初の公立常設保育所として旧陸軍禁野火薬庫の一部を転用する形で、現在の中宮北町に開設されました。戦後の混乱期だった当時、戦争で父親を失った母子家庭を支援するためにも保育所の建設は急務となっていました。開設時の建物は弾薬を運ぶために津田駅まで敷かれていた軍用鉄道の駅舎をそのまま利用していたことから、窓は高く保育にはあまり適していなかったようです。

定員は3歳から5歳児までの100人と決まっていたのですが、時にはそれ以下の年齢の子どもも面倒を見ることがありました。とにかく困っている人の子どもはすべて引き受けようという風潮でした。昭和30年代から保育士として働いていた女性は、先輩保育士から開設当時の大変だった様子をよく聞いていました。「戦後の大変な時期だったので人手や物資は不足しており、保育士たちはみんな休む暇なく働いていました。給食用の野菜を八百屋さんや農家に差し入れしてもらうなど、地域に支えられながら必死に運営していたそうです」と当時の様子を語ります。大変な時代でしたが、保育士たちは子どもたちが楽しそうに遊んだり歌ったりする元気な姿を励みに頑張っていました。

中宮保育所は昭和33年に中宮公園の南側に移転し、昭和49年には現在の中宮山戸町に移りました。鉄骨平屋建てで遊戯室や園庭、子ども用のプールなどを備える現在の施設には0歳から5歳児までの103人が通っており、今も昔と変わらず遊ぶ子どもたちの元気な声が響き渡っています。

（平成23年5月号）



▲昭和27年10月、「秋の清掃週間」で旧市役所前（現在のサンプラザ1号館付近）に勢揃いした肩引き車（写真上）と3輪トラック（同下）。



▲約60台のバックカー車が週2回、市内全域を回って家庭ごみを収集しています。



市民の快適な暮らしを支える

ごみ収集

現在のような市による定期的なごみ収集が始まったのは、戦後間もない昭和23年9月のこと。地域は枚方小学校区（当時）のみと限られていましたが、やがて市内全域へと拡大していきました。当初は「肩引き車」と呼ばれる人力車のみでしたが、能率を上げるために3輪トラックを導入し、さらに3輪ダンブカーを使用するようになりました。昭和43年から収集業務をしている60代の男性は「ハンドルを切ると運転席がガクツと傾いて何度も頭をぶつけました」と懐かしそうに振り返ります。当時は週1回、各家庭の玄関先を一軒ずつ回る戸別収集で、「ごみを集めるための大きなかごを紐で引っ張りながら歩き、鐘をカランカランと鳴らして収集に来たことを知らせていました」。分別という考え方はまだなく、あらゆるごみが一緒になっていたため、かごの重さは相当なものでした。「ダンブカーに積みば積むほどかさ高くなるので、荷台の一番上に積むのが重くて大変でね」。それでも、夏の暑いときにタオルを差し出してくれたりお茶を用意してくれたりと、市民の感謝の気持ちに癒されたそうです。

3輪ダンブカーは、昭和40年代に入ると回転板でごみを圧縮して大量に収集するバックカー車へと徐々に入れ替えられ、戸別収集も、人口増加に対応するため昭和53年から現在のごみステーション方式となりました。ビンやガラス、空き缶、プラスチックなどの分別も進み、ごみ収集は市民の快適な暮らしを支え続けています。

（平成23年6月号）



▲土砂を運ぶトロッコ線が走る河川敷（昭和27年）。奥には京阪本線の鉄橋が。手前の橋は翌年コンクリート製に改修され、「天津橋」と名付けられました。



▲今の天津橋付近。橋は平成4年に架け替えられた2代目です。



▲林さんが交野の郡津付近で撮影した堤防沿いの道（昭和32年）。右手が釈尊寺周辺。枚方市内から田園風景が続いていました。

平安歌人が「七夕伝説」になぞらえた

天野川

水源の生駒山地から、枚方市域を横断して淀川へと流れ込む天野川。名前の由来ははっきりしませんが、平安時代の歌人・在原業平が枚方を訪れた際、川の名前を七夕伝説になぞらえ「狩り暮らし たなばたつめに宿借らむ 天の河原に我は来にけり（狩をしていたら日が暮れてしまった。今夜は織姫様に宿を借りよう。私は天の川に来たのだから）」と詠んでいます。古今和歌集や伊勢物語でこの句を知った平安貴族は、七夕伝説に想いをはせていたかもしれません。

「堤防沿いの道路は未舗装で、その周囲は延々と田んぼが続いていました」と話すのは、昭和27年から約40年間市内で教師をしていた林和明さん（81歳）。昭和32年秋、顧問として第一中学校のワンダーフォーゲル部を引率し、自転車に乗って川沿いに交野の磐船までさかのぼったことを懐かしそうに振り返ります。「自転車にまだ市税がかかっている時代のことです。車も通らないのどかな中をゆつくりと進みましたよ」。田園が広がっていた風景は、開発が進み変貌を遂げました。昭和30年代頃までは工事に伴う土砂をトロッコで運ぶ光景が各地で見られ、天野川にも田宮辺りから淀川との合流地点まで、河川敷に沿って線路が敷かれていました。現在の河川敷には遊歩道が整備され、毎年7月には天津橋付近で地元商店街が中心となり「七夕まつり」が開かれるなど、天野川は今も市民に愛され続けています。

（平成23年7月号）



▲延べ17万人が訪れた第1回枚方まつりで、北大阪商工会議所東側を通過するパレードの様子。写真中央は当時の北枚市長です（昭和51年）。



◀現在は岡東中央公園を中心に開催しています。



▲友好都市の中村市から応援に駆け付けた提灯みこし。まつりの花形として注目を浴びていました（昭和51年）。

夏を彩る市民手作りの

枚方まつり

枚方まつりの誕生は昭和51年。そのルーツは昭和31年に始まった「淀川まつり」です。淀川を下る1万個の灯籠や夜空を焦がす打上花火など、夏の風物詩として定着していた淀川まつりは、オイルショックによる景気低迷の影響で昭和50年に中止が決定されました。「まつりは人々を日常から解き放ってくれる貴重な存在でした。復活を望む声はあちこちから聞かれました」と第1回枚方まつり実行委員長の宮崎順平さん（75歳）は振り返ります。「まつりで不況を吹き飛ばしてまちに活気を取り戻そう」。宮崎さんから枚方青年会議所のメンバーが中心となって夏まつりの復活に乗り出しました。友好都市・中村市（現在の四万十市）の青年会議所に参加を呼び掛けたり、資金集めのバザーを開くため市民から提供品を募ったり。「試行錯誤の連続で、みんなで必死にアイデアを出し合いました」。

手作りのまつりにどれだけの人が来てくれるのか不安だった宮崎さんでしたが、当日は家族連れや浴衣を着た人たちがあふれ返りました。枚方市駅周辺には多くの屋台が立ち並び、音楽隊のパレードや中村市の提灯みこしが威勢の良いかけ声とともに練り歩きました。宮崎さんは「開催してくれてありがとう」という声を聞いて嬉しかったです」と当時を振り返ります。

枚方まつりは平成16年から「天の川七夕フェスタ」と一時名称が変わりましたが、平成21年から再び「枚方まつり」として開催され、今も多くの市民で賑わっています。

（平成23年8月号）



▲昭和44年当時の津田支所（旧津田町役場）。



▲現在の津田支所（津田北町2丁目）。今年で開設40年を迎えました。



◀津田町役場が建っていた場所（津田元町3丁目）。現在は保育園になっています。

町の合併も見届けた東部の拠点

津田支所

昭和30年10月15日、枚方市は東側に隣接する津田町と合併し、現在の市域になりました。

津田元町にあった津田町役場は、大正4年に竣工したモダンな木造の洋風建築で、もとは警察署でしたが、昭和18年から町役場として使われるようになりました。「中に入ると円形のカウンターがあつてね。とてもオシャレしていましたよ」と話すのは津田元町で古くから続く呉服店を営む西村利彦さん（78歳）。「屋根の天窓みたいなのところにサイレンがあつて、戦時中はそこから空襲警報が鳴りました」と振り返ります。役場の前の通りは飲食店や本屋、薬局など30軒以上の店が立ち並ぶ商店街で、多くの買い物客でにぎわっていました。「役場利用事のお客さんが、帰りによく私の店にも立ち寄ってくれてね。この辺りは何でもさうから便利だと話していましたよ」。秋になると、近くの山へ松茸狩りに訪れる観光客も。「遠方から通りの料理屋に泊まりがけで来る人もいたんですよ」。

合併とともに支所となった津田町役場は、昭和46年、老朽化に伴い半世紀を超える現役生活に幕を下ろしました。鉄筋コンクリート造りの新しい津田支所は、同じ年に国道307号線沿いに開設。平成2年に併設された津田図書館・公民館（現生涯学習市民センター）とともに、東部の拠点として市民生活に欠かせない場となっています。

（平成23年9月号）



▲移転する前の姿。現在よりも300m京都寄りにありました（昭和40年代前半）。



▲現在の場所に移ったのは昭和46年。今年で40年を迎えます。一日の乗降客数は約6万人です。



▲京阪電鉄初の自動改札機が設置されました（昭和47年頃）。

沿線一小さな駅から、にぎわいの拠点へ

樟葉駅

通勤客やくずはモールへ買い物に向かう人のにぎわう樟葉駅は、かつて京阪本線で最も乗降客の少ない小さな駅でした。

明治43年、京阪電車の開通と同時に開設されましたが、周辺は湿地や池、田んぼばかりで、ホームで出会う人はほとんどが顔見知りというくらい利用者は限られていました。「当時は家から駅が見えていたんですよ」と話すのは、南楠葉から電車で第一中学校に通っていた森本萬治郎さん（75歳）。「乗り遅れそうなときは大急ぎで走りながら叫んで、顔なじみの駅員さんに電車を止めてもらったこともありました」。町楠葉の中村壽雄さん（71歳）は「並んで走る旧国道1号から車がよく落ちてね。スイカを積んだトラックがひっくり返ったときは割れたスイカをもらいに行きましたよ」と幼い頃の思い出を語ります。楠葉地域は低地帯で今とは違い水はけも悪く、台風や大雨の時は一帯が水に漬かることも。「雨は怖かったですけど、田んぼに上がったコイやフナを獲りに行くのが楽しかったですね」。昭和30年代までは一日の利用者数が1500人に満たないのどかな雰囲気でしたが、広さ136万㎡の住宅地「くずはロースタウン」の開発により、昭和46年に新しいまちの玄関口として現在の場所に移設されました。京阪電鉄初の自動改札機も導入され、翌年には駅前に広域型ショッピングセンター「くずはモール街」もオープン。近隣から買い物に訪れる家族連れも増え、昭和50年代には乗降客数が40倍以上に膨れ上がりました。現在は特急も停車する沿線の主要駅として、多くの人が行き交っています。

（平成23年10月号）



▲造成中の枚方企業団地（昭和41年）。左下の新大池から右上（京都方面）に延びるのが枚方バイパスです。



▲建設中の枚方バイパス（昭和37年）。現在の穂谷川新橋から大阪方面の出屋敷交差点付近を望んでいます。



▲現在の出屋敷交差点付近。一日の交通量は約7万台（平成22年）。開通時は約3万台でした。

産業の発展を支える交通の大動脈

枚方バイパス（国道1号）

市域を貫く国道1号枚方バイパスが全線開通したのは昭和41年。高度経済成長期の真ただ中でした。

昭和30年代に入ると、自動車の普及とともに淀川沿いの旧国道1号（現在の府道京都守口線）は交通量が飛躍的に伸び、慢性的な渋滞に悩まされるようになりました。渋滞緩和に向け計画された枚方バイパスは京都・伏見〜中振間約20kmを結ぶ片側2車線の新たな幹線道路で、昭和33年に着工。鷹塚山を切り通し、天野川に橋を架けるなど工事は8年にわたる大事業でした。

バイパスの設置に伴い、沿道には既製服団地（現在の大阪紳士服団地）、中小企業団地（同枚方企業団地）、枚方鉄工塗装団地などが造成され、多くの企業が集まりました。枚方企業団地は府内中小企業の郊外移転と経営効率化を目的に計画されたもので、府や市が企業団地を造成するのは全国初の試みでした。「当時は右肩上がりの経済成長の中、次々と仕事が舞い込んでね。みんな夜遅くまで必死に働いていました」。枚方企業団地協同組合理事長の豊川總雄さん（70歳）は振り返ります。豊川さんが働く会社もバイパス開通とほぼ同時に大阪市内から枚方へ。「製品の輸送が便利になりました。さまざまな業種が集まる企業団地は当時珍しく、海外からの視察もあつたんですよ」と懐かしそうに話します。

多くの車が行き交う枚方バイパスは、京都と大阪を結ぶ交通の大動脈として今も市内産業の発展を支え続けています。

（平成23年11月号）



▲当時の国道1号(現在の府道京都守口線)が通る淀川堤防沿いに建っていた枚方警察署。2階が玄関でした(昭和32年)。



▲大垣内町にある現在の枚方警察署。



▲前庁舎があった桜町交差点付近。右後方に枚方大橋が見えます。

市民の安全を守り続ける

枚方警察署

枚方警察署は大正2年、淀川改修工事の完了とともに三矢から枚方大橋近くの堤防沿いに移されました。昭和9年の室戸台風で木造庁舎が倒壊した3年後、鉄筋コンクリート3階建ての新庁舎が同じ場所に完成。真っ白な外壁に、階段室は半円形で大きなガラス張りというしゃれた建物は、着工時の新聞記事に「河北随一を誇るモダン庁舎」と書かれたほどでした。

「前方には淀川が広がり周辺は民家ばかり。とても大きくて目立っていましたよ」と話すのは、昭和40年代から警察官として交通課などで勤務していた60代の男性。「3階には道場があって、柔道や剣道で心身を鍛えました」と懐かしそうに振り返ります。当時は24時間勤務の2交代制。「人も車も急増している時代だったので交通事故が多くてね。まだ周りに田んぼが広がる道路を現場から現場へ一晩中走り回っている時もありました」。

昭和29年の法改正に伴い旧交野町域などを含む現在の管轄区域となった枚方警察署は、昭和55年に大垣内町の現庁舎へ移転。国道1号など主要幹線道路に近くなり事故や事件の発生後、すぐ現場に向かえる体制が整いました。管内人口は昭和29年の約7万人から、現在は50万人近くまで増加。平成24年度には管内から枚方市東部と交野市全域を分割し新たに交野警察署が開設され、さらなる治安の確保や利便性向上が図られます。

(平成24年1月号)



▲京阪電車が開通する前、明治30年代末～40年代初頭の御殿山から見た風景。中央に見えるのは現在も残る廃観音寺の鐘楼です。



▲田園地帯は住宅地に。春には御殿山神社の桜が咲き誇ります。



▲牧野村役場。昭和10年に招提村と合併して殿山町となった後も、しばらく役場として使用されました。

鐘のある村役場を見下ろした

御殿山

田畑と集落が広がるのどかな風景。御殿山神社から北方向を撮影した絵はがきです（中央上の写真）。手前の集落は現在の渚元町で、奥に三栗の町並みと淀川、天王山が見えます。明治時代、日露戦争を機に、戦地との間で手紙のやり取りが盛んになったことから絵はがきブームが起り、枚方の写真を印刷した絵はがきも多く製造されました。

この辺りは、平安貴族が鷹狩りなどを楽しむ行楽地で、惟喬親王の別荘・渚院（なづのいん）もこの地にありました。明治22年に渚・禁野・磯島など9つの村が合併して牧野村となり、渚院が建っていたと伝わる廃観音寺の鐘楼の隣に役場が置かれました。「敷地内には駐在所もあって、村の中心でしたね」と話すのは、牧野村の農家に生まれた90代の男性。「役場近くの駄菓子屋によくアメを買いに行きました。仕出し屋もあって、特別な日には父親が寿司を取っていましたよ」と、子どもの頃を懐かしそうに振り返ります。「御殿山神社の秋祭りにはプロの漫才師が来ることもあってね。祭りの日が楽しみで、友達と一緒に見に行っていました」。

現在、役場があった場所（渚元町）には渚保育所が建ち、園庭を駆け回る子どもたちの元気な声が響きます。田園風景は住宅地へと変わりましたが、今も残る廃観音寺の鐘楼が時代の流れを静かに見守っています。

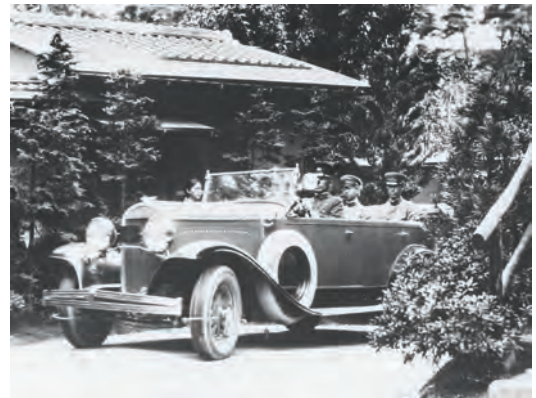
（平成24年2月号）



▲明治時代の絵はがき。駅鈴をデザインしたスタンプが押されています。森のように見えるのは小高い丘で、その先は枚方村（現在の枚方元町）です。



◀道路手前から広がる敷地に万里荘がありました（伊加賀北町）。



▲「万里荘」に到着した秩父宮殿下（昭和6年）。

広がる野山に大邸宅が建っていた

伊加賀

古くから集落があり平安中期の文献「和名抄」に登場する伊加賀は、現在の菊丘町や枚方公園町などを含む広大な地域でした。

上の写真は明治時代の伊加賀村で、中央に見える鳥居をくぐって階段を登ると意賀美神社がありました。同神社は、明治42年に日吉神社、須賀神社を合祀して現在の枚方上之町に移され、残った社地は子どもたちの遊び場に。「宮さん跡」と呼んでいたね、よくチャンバラごっこをしていましたよ」と話すのは、伊加賀南町で生まれ育った細川信夫さん（84歳）。当時は野山や田畑が広がり「夏になるとカブトムシやゲンジ（クワガタ）も捕れたんですよ」と懐かしそうに振り返ります。

のどかな場所だった伊加賀には、6000坪の広大な敷地に建つ屋敷「万里荘」がありました。鉄道車両を製造する会社社長の邸宅で、数奇屋建築の格式高い建物でした。昭和6年には、昭和天皇の弟・秩父宮殿下が高槻工兵隊入隊のため1カ月間滞在。「万里荘にいらっしゃるところを、住民総出でお迎えしました。ちょうちん行列も出ですごいにぎわいでした」と細川さんは目を細めます。

現在、意賀美神社跡周辺は住宅地になり、万里荘があった場所にはマンションが建ち並ぶなど大きく変わりましたが、起伏のある地形が当時の面影をしのばせてくれます。

（平成24年3月号）

◀ 遠方からも多くのお客さんが訪れ、480の座席がいっぱいになることも（昭和18年頃）。昭和30年代には市内に7つの映画館がありました。



▲現在は12軒の住宅が建っています。



▲プールのオープン時にはオリンピック候補選手も駆け付けたほか、市内企業が定期的に水泳大会を開催していました（昭和30年頃）。

子どもたちがスクリーンに声援を送った

中宮映画劇場

テレビもなく娯楽も少なかった時代、誰もが夢中になったのは映画でした。

中宮映画劇場は昭和18年頃、地元の実業家・徳永和三郎さんが現在の都丘町に建設。近くにあった陸軍の枚方製造所で働く人たちを中心に多くの人でにぎわいました。戦後、映画人気が高まるなか、「笛吹童子」などチャンバラ映画の上映日には子どもたちが行列を作り、スクリーンに向かって大きな声援を送ることも。「お客さんは売店でみかん水とおかきを買って映画を観るのが定番でした」と話すのは、劇場の手伝いをしてきた徳永さんの三男・司さん（63歳）。「父は香里園や岡本町でも劇場を経営していて、重たいフィルムを抱えていつも自転車で走り回っていました。映画でみんなを笑顔にしたかったのでしょうね」。

和三郎さんは昭和28年頃、劇場の北側に25mと子ども用の2つのプールを備えた「徳永遊園プール」も開園。当時、市内には枚方小学校にしかプールがなく、夏休みには大勢の子どもたちが訪れました。劇場のすぐ近くに住んでいた泉太郎さん（68歳）は「ふんどし一丁で泳いでいましたよ。水は地下水だったので冷たかったなあ」と笑顔で話します。

昭和43年に和三郎さんが亡くなり、映画館の経営は他に移りました。プールは46年頃に廃業。映画館があった場所は住宅になりましたが、プールをそのまま再利用した駐車場には今も飛び込み台の番号が残り、当時をしのばせてくれます。

（平成24年4月号）



▲現在の宮之阪3丁目付近（昭和29年）。中央が現在の宮之阪駅で、道路の奥に禁野橋、遠景には枚方丘陵が望めます。撮影した西禁野在住の橋本勲さん（80歳）は「景色が素晴らしかった」と振り返ります。



▲駅周辺には商業施設やマンションが立ち並びます。



▲現在の枚方警察署付近から橋本さんが撮影した木造の禁野橋（昭和29年）。

まちの発展とともに駅名も変わった

宮之阪

国指定の史跡である禁野車塚古墳がある宮之阪はもととも禁野村に含まれ、野山が広がっていました。明治42年に起こった禁野火薬庫の最初の爆発により、村の中心から農家が移り住んだことが集落の起源とされています。大正時代には「宮ノ坂」という地名はありましたが、現在の宮之阪駅は昭和15年、京阪交野線の前身・交野電気鉄道時代に、東側に隣接する中宮に住宅が多くあったことから「中宮駅」として誕生しました。「電車は木造でね。たった2両でのどかに走っていましたよ」と話すのは、小学生の時から駅の近くに住む豊倉孝宏さん（78歳）。「買い物時は岡本町の商店街まで電車で出掛けていました」と懐かしそうに目を細めます。駅の周り是一片の田畑で「夏になると、近くの小川でホタルを見ることができると、近くの小川が自然があふれていました。

昭和31年に中宮第一団地が建設されると人口は急増しました。45年、天野川沿いに大型スーパーが開店したことをきっかけに、小売店などが相次いで進出。近隣のまちからも多くの買い物客が訪れ、活気あふれるまちへと変わりました。そんな中、中宮駅を初めて利用する人が宮之阪周辺を「中宮」と勘違いするケースが頻発。「実態とそぐわないので駅名を変更してほしい」という地元住民らの要望を受け、46年に「宮之阪駅」と改称されました。

現在も新たなマンションが建設されるなど発展を続けていますが、拡幅工事が進む道路は今も変わらず禁野橋へと通じ、当時の面影を伝えます。（平成24年5月号）

昔



◀(上)奥は天野川堤防。左の白い建物は旧公共職業安定所。(右下)まんが(馬鍬)を引っ張り代掻きをする牛。いずれも西禁野の橋本勲さん(80歳)が現在の枚方消防署や枚方郵便局付近で撮影(昭和29年)。



今



▲耕運機のエンジン音を響かせ土を耕す大村さん。

働く牛が農家の「宝」だった

大垣内の稲作

天野川左岸に位置する大垣内町辺りは豊かな水に恵まれ、古くから稲作が行われてきました。現在は消防署や郵便局などが建ち並ぶ場所も、昭和20年代は水田が一面に広がっていました。天野川から湧き出る水をためた池が堤防沿いにいくつもあり、農家の人々はポンプの代わりに水車を踏んで田へ水を引いていました。大垣内町で農業を営む大村宗治さん(75歳)は「きれいな水だね。禁野橋近くにあったうどん屋はその水を使って製麺していましたよ。川ではエビをよく獲ったなあ」と懐かしみます。

田植前は牛が大活躍。「まんが」と呼ぶ農機具を引っ張って田を起こしたり重い荷物を運んだり、貴重な労働力でした。「牛は農家の宝でした」と話す同町の大矢作市さん(87歳)は「農繁期には草だけでなく麦やおからで精を付けてね。正月は雑煮も食べさせましたよ」と、大切に育てた牛について振り返ります。

当時の農家は、米はもちろん野菜や卵、みそなど全て自宅で賄う生活。「ほぼ自給自足でした。いたって粗食で、今のようにはメタボの心配なんて考えられなかった」と大村さんは話します。

30軒ほどが農業を営んでいた大垣内のだんな田園風景は、昭和40年代の官公庁団地の造成など開発が進み、その姿を大きく変えました。それでも数軒が現在も農業を営み、牛に代わるトラクターや耕運機がエンジン音を響かせながら土を耕しています。

(平成24年6月号)



▲昭和40年頃の長尾駅。駅前広場は手前の田んぼに向かって下り坂になっていました。



▲一日の乗降者数は約2万6000人（平成22年現在）。奥に工事が進む新駅舎が見えます。



▲平成元年に長尾－木津間が電化されるまで走っていたディーゼルカー。

駅前広場で映画や盆踊りも楽しめた

長尾駅

JR長尾駅は明治31年、大阪と奈良を結ぶ鉄道の駅として誕生しました。開通式には花火が打ち上げられ、汽車の姿を一目見ようと多くの人がお弁当持参で駆け付けるなど、鉄道の誘致運動を進めていた菅原村の住民が総出でお祝いしました。

昭和25年には四条畷－長尾間が電化され、電車が走るようになりました。長尾駅のすぐ近くに住む長尾区長の笹田庄次さん（67歳）は「客車を引っ張る最後の蒸気機関車に向かって日の丸の小旗を一生懸命振りました」と当時5歳の思い出を語ります。その頃電車の本数は1時間に1本程度。駅の利用者も知り合いばかりで、駅員さんが「○○さん着きましたで！」と車両の中で寝てしまったお客さんの名前を呼んで起こすこともありました。

また、駅前広場は、中央に柳の木があり、夏は盆踊りでにぎわうなど、地域住民が集う場所でした。駅前周辺は田んぼが広がり、車の通行もほとんどなかったことから、道路を隔てた田んぼの手前にスクリーンを立て、チャンバラ映画などの上映会が開かれたことも。笹田さんは「晩ごはんを食べるとすぐ、座布団片手に広場へ走りました」と懐かしそうに振り返ります。

長尾駅沿線は昭和40年代以降、宅地開発が進み利用者数は大きく増加。平成9年には学研都市線が東西線とつながり、神戸方面へのアクセスも便利に。現在はラッシュ時の混雑緩和や歩行者の安全確保に向け、新駅舎や駅前広場などの整備を進めています。

（平成24年7月号）

▲駅前広場と直結した開放的な正面入り口。中央奥に見える塔からは時刻を知らせる鐘が鳴り響いていました（昭和47年）。



▲本館の増床工事のため西館（左）は閉館中。営業面積を1.5倍に増やして平成26年春リニューアルオープンの予定です。



▲くずはモール街のシンボルだったD51（昭和47年）。現在は京都のトロッコ嵯峨駅に展示されています。

緑いっぱいの空間で芸能人もやってきた

くずはモール

今から40年前の昭和47年、前年開業の新しい樟葉駅前、京阪電鉄が駅前と一体で開発した広さ約136万㎡に及ぶ「くずはローズタウン」の核となる商業施設「くずはモール街」が誕生しました。

池を配した公園風の広場を中心に約60の専門店やスーパーが放射線状に置かれ、ポウリング場や銀行のほか1500台収容の駐車場も完備。当時珍しかった広域型ショッピングセンターの先駆けとして大きな注目を集めました。「樹木や花壇、緑がいっぱいでも歩くだけでも気持ちよくてね」と話すのは楠葉並木に住む中山宏仁さん（65歳）。「入り口の大看板はクリスマスや正月など季節に合わせて飾り付けられ、シーズンが終わると飾り付けの花をもらっていました」と振り返ります。

モールの中心には蒸気機関車D51を展示した「汽車のひろば」があり、池の上のステージにデビュー間もない山口百恵など有名タレントが毎週のようにやってきました。「水前寺清子さんや上沼恵美子さんの時は2階のテラスまで見物客でいっぱいでしたよ」とにぎわいの様子を懐かしむ中山さん。「周りには大きなバスターミナルや高層マンションなど当時最新の施設が立ち並び、夢のようなまちだと思いました」と目を細めます。

30年以上親しまれた「くずはモール街」は平成17年、新たな時代のニーズに対応するため全館建て替えられ、「KUZUHAMA MALL」としてリニューアル。現在はさらなる増床計画が進められています。

（平成24年8月号）



▲昭和34年の台風7号で増水した三矢付近の淀川。奥は先代の枚方大橋。堤防上には不安そうに川面を眺める人の姿が。



▲川の流れを改修して生まれた淀川河川公園。左奥にはスーパー堤防上に建つマンションが見えます。



▲桜町交差点付近に立つ明治18年の洪水碑。被害を風化させないよう翌19年に建てられ、平成22年、現在の位置に移されました。

恵みと水害をもたらした悠久の流れ

淀川

江戸時代には三十石船が行き交うなど枚方の発展を支えてきた淀川。一方で洪水がたびたび発生し大きな被害をもたらしました。豊臣秀吉が左岸に全長27kmの「文祿堤」を築き、明治になるとオランダ人技師の指導で工事が行われるなど、治水は大きな課題でした。明治18年には、梅雨の長雨で伊加賀を皮切りに堤防が次々と決壊し、府内で家屋の浸水7万戸、被災者30万人の大水害が発生。全国に先駆け本格的な河川の改修が進められるきっかけとなりました。

昭和初期の大雨による増水を幼い頃に経験した三矢の片山正勇さん（92歳）は、「橋の上から手が届きそうなくらい水位が上がってね。家の裏手の堤防から水が染み出しました」と振り返ります。「もう決壊するぞ」という声に、近所の住民ほぼ全員が着の身着のまま、高台にある台鏡寺に避難したんですよ。幸い決壊は免れましたが、「家が流されるかもしれないという恐怖と、濁流のごう音が今も忘れられません」。

昭和63年、市街地側に堤防の高さの約30倍の幅で広範囲に盛土をして、洪水被害を小さくするスーパー堤防が全国で初めて出口地区に完成。平成9年には、枚方地区で左岸に蛇行していた流れを真っ直ぐに改修する工事が完成し、洪水の危険性は大きく下がりました。グラウンドや船着場、イベントに利用できる広場がある淀川河川公園も整備され、週末には市内外から多くの人を訪れるなど憩いの場として親しまれています。

（平成24年9月号）

枚方市が歩んだ65年



▲昭和17年に竣工した旧枚方町役場庁舎が市役所に（現在のサンプラザ1号館付近）。



▲内務省（当時）に提出した市制施行上申書

昭和39年 東京オリンピック

日本国憲法施行

- | | | | | | | | | |
|---------------------------|---------------------------|----------------------------------|-----------------|--------------------------------------|------------------------|-----------------|--------------------------|-----------------|
| 昭和43年 | 昭和42年 | 昭和41年 | 昭和35年 | 昭和33年 | 昭和30年 | 昭和25年 | 昭和23年 | 昭和22年 |
| ● 国の特別史跡・百濟寺跡が日本で最初の史跡公園に | ● 市制施行20周年を記念して「菊」を市の花に制定 | ● 市内を南北に貫く国道1号枚方バイパスが全面開通（18ページ） | ● 市役所新庁舎（現本館）竣工 | ● 「東洋一」と言われたマンモス団地・香里団地の入居始まる（10ページ） | ● 津田町を合併。現在の市域に（16ページ） | ● 市民病院が開院（7ページ） | ● 定期的な家庭ごみ収集がスタート（13ページ） | ● 市制施行
人口4万人 |



ひらかたパークの「ひらかた大菊人形」で枚方の代名詞となった菊人形。平成17年の閉幕後は「ひらかた市民菊人形の会」が菊人形作りに取り組んでいます。

◀ひらかた大菊人形「忠臣蔵絵巻」（昭和57年）

「ひらかた」の地名はいつから？

いつ頃から「ひらかた」と呼ばれるようになったのかは分かりませんが、『日本書紀』には「ひらかたゆ 笛吹き上る 近江のや 毛野の稚子い 笛吹き上る」という歌が残されています。また、奈良時代の『播磨国風土記』には「河内国茨田郡枚方里」という地名が記されています。



▲昭和40年代以降、宅地開発が進んで転入者が増加し、子どもの数も急増しました。市は昭和40年から20年かけて46の小・中学校を新設しました。特に昭和45年以降は校舎の増築や学校の新設が児童・生徒の増加に追い付かず、プレハブ教室が急増。校庭の大半をプレハブ教室が占める学校もあるほどでした。



▲駅前広場が整備され百貨店も進出した枚方市駅前再開発事業（昭和50年）。

第1次オイルショック

大阪万博

昭和57年

●楠葉公民館（現生涯学習市民センター）オープン

●府内初の非核平和都市宣言

昭和51年

●第1回枚方まつり（15ページ）

昭和50年

●枚方市駅前再開発事業完成

昭和49年

●高知県中村市（現四万十市）と初の友好都市提携

昭和48年

●市立図書館発足。分室や自動車文庫も開設

昭和47年

●本格的なショッピングモールの先駆け「くずはモール街」オープン（26ページ）

●市民会館大ホール完成

昭和46年

●市民によるまちづくりの思いをうたった枚方市民憲章制定

昭和45年

●人口20万人を超える

昭和44年

●全国初の病児保育室が香里ヶ丘に誕生

築40年以上が経過した現在、新たな総合文化施設の整備に向けた検討を進めています。

医療機関併設型の病児保育室は全国のモデルに。現在は4カ所あり、働く親の強い味方となっています。



▲昭和52年の選抜高校野球で、友好都市・中村市の中村高校が部員12人で準優勝。市民会館大ホール前で祝賀歓迎会が行われました。



▲平成4年、全国高校ラグビーで初優勝した啓光学園（現・常翔啓光学園）が枚方市駅前をパレード。その後東海大仰星高も優勝を果たし、枚方は「ラグビーのまち」として知られるように。



▲高架化工事が進む枚方市駅（平成3年）。

平成12年 介護保険法施行

阪神・淡路大震災

消費税導入

平成15年

平成13年

平成11年

平成10年

平成7年

平成5年

平成4年

平成元年

昭和63年

昭和58年

●枚方市駅・樟葉駅に平日昼間と土曜・休日の終日特急停車

●枚方宿鍵屋資料館オープン

●市内6大学と市民、行政が連携したまちづくりを目指す「学園都市ひらかた推進協議会」設立

●市内全域で高度浄水処理水の供給を開始

●人口40万人超える

●阪神・淡路大震災の被災者支援として救援対策室を設置

●着工から15年に及んだ枚方市駅高架化工事が完成

●全ての駅周辺が自転車放置禁止区域に

●禁野火薬庫爆発50年を機に3月1日を「枚方市平和の日」に制定

●全国に先駆け知的障害者のガイドヘルプ事業をスタート

●総合体育館オープン

オゾンと活性炭による高度浄水処理を導入。カビ臭はほぼ100%なくなりました。

災害時の貴重な情報伝達手段として、平成9年にはコミュニティ放送局「エフエムひらかた」を開局。

▼平成24年3月1日、メッセージキャンドルに明かりを灯す「平和の燈火(あかり)」を実施。平和の大切さを伝え続けています。



▲枚方宿鍵屋資料館オープン当日の大名行列（平成13年）。今では枚方宿周辺で町屋を生かしたおしゃれなカフェや雑貨店が増え、買い物や音楽を楽しむイベントも定期的に行われています。





▲「にほんの里100選」に選ばれた穂谷の里山。



▲毎年4月の「さくらまつり」では桜並木を眺めながら天野川堤防を走る人力車が人気です。

東日本大震災

障害者自立支援法施行

- 平成24年
 - 健康医療都市ひらかたコンソーシアムを創設
 - 市制施行65周年
- 平成23年
 - 東日本大震災の発生を受け災害復興支援基金を設置
- 平成22年
 - 第二京阪道路が全線開通
- 平成21年
 - 穂谷地区が「にほんの里100選」に選ばれる
- 平成20年
 - 新火葬場やすらぎの杜、東部清掃工場オープン
- 平成19年
 - 全45小学校区で自主防災組織が発足
 - 市制施行60周年を記念して「桜」を市の花に制定
- 平成18年
 - 関西医科大学附属枚方病院が開院
 - 津田サイエンスヒルズがオープン
 - 下水道普及率が90%を超える
- 平成17年
 - 輝きプラザきらら、中央図書館オープン

病院・大学など市内13の医療関係機関でコンソーシアム(共同事業体)を創設し、「健康医療都市ひらかた」の実現を目指します。



▲岩手県大槌町でガソリン給油を行う職員(平成23年4月)。東日本大震災の被災地を支援するため枚方市支援本部を設置し、救援物資の提供や職員の派遣などを行いました。



◀第二京阪道路。

▼やすらぎの杜。





枚方市市制施行65周年記念冊子 写真で見る ひらかた今昔

平成24年11月発行

制作：枚方市政策企画部 広報課

〒573-8666 大阪府枚方市大塚内町2丁目1番20号

電話：072(841)1221(代表) ファクス：072(846)5341

電子メール：kouhou@city.hirakata.osaka.jp

ホームページ：http://www.city.hirakata.osaka.jp

表紙…旧三矢村辺りと思われる在りし日の枚方宿（明治後期）。

裏表紙…現在は街道沿いで月1回開かれる手作り市「枚方宿くらわんか五六市」でにぎわいます（平成24年）。